

---

# ミラクル症候群

水姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ミラクル症候群

### 【Zコード】

Z0393B

### 【作者名】

水姫

### 【あらすじ】

桃谷沙良は普通の女子高生。そんな沙良のもとに、空から異界人が降ってきた！？しかもその子は特異体質で……。常識人沙良と電波系朱鳥のちょっとエッチなどたばたファンタジーコメディ

## プロローグ

ここは異世界。

たくさんの特異種族が暮らしている。翼を持つ者、自然の力を司る者、何千年も生きる者など…。

そして、この世界の全ての住人が魔法を使えた。

その中には、猩色族という種族がいた。ある事件がきっかけで、今は数少ない種族である。また、この猩色族も例外なく、特異体质であった。

## プロローグ

「朱鳥、何処行くんだ？」

「ちよつと月夜湖に。」

「じゃあ俺も…」

「ダメ。一人でランデブーするんだ」

「……。」

朱鳥アスカと呼ばれた者は、朱色の髪を揺らし、スキップしながら外へと出ていく。外見からして、15、16歳ってところだ。

そんな朱鳥を冷ややかな眼で見ているのは、青い頭をした青年。見た目、さわやかフェイス。

「一人じゃランデブーにならないよ。」

「シン、と黄緑色した髪の少年が朱鳥の頭を軽く叩いた。

「あら、翠。」

「それに、もうすぐ夜になっちゃう…。」

「あつ！それは危ない！かわいい私は襲われちゃうわvvキヤー怖い！だから男って嫌。もう私に近付かないで。」

「なんでもうなるんだよー。」

「うわ、翠サイマー。」

「何」につらー・ムカつくんだけどおー。」

無茶苦茶な言葉に、シシ「ミミをこられるのは彼女の弟、【紫音翠】シホンミツ。  
そして冷めた田で翠を罵るのは、この一人の兄である、【黑夜青空】ハクヨウセイエイだ。

「まあ、それはどうでもいいとして…」

「アーッ（涙）」

「じゃあ私行つてくるから～。」

「無視！？」

太陽は沈みかけ、薄暗い空には星がいくつか光っていた。

「今日は月が明るいし…。狼男なんかに会つたらやだなあ。」

朱鳥は湖の前に立つて、中を覗いていた。

「う～ん…幻想的。」

（「…れなら、あの伝説もあながち嘘じやないかも。」）

いつのまにか太陽は消え、西の空には満月が顔を出している。

「…そろそろかな。ああもうつー猩色族つて面倒くさいイー！まあ私は才色兼備だから文句言わないわ〜〜ああ、私つて何ていい女なの

「

自画自贊する朱鳥。ついでに才色兼備の意味を理解せずに言つている。

風が吹き、木々がざわつく。ふと、背後に気配を感じ振り向こうとした時、背中を思いきり押された。

「わっ…ちょっ…！」

大分近付いて覗いていた為、簡単に湖へと落ちる。

バシャンッ！

水しぶきが舞い、朱鳥はここから姿を消した。

「見極めなさい。」

突き落とした張本人はそつぬき、風と共に去つていった。

しかし、落とされた朱鳥はそんな事知るよしも無く、

(「この朱鳥様を突き落とすなんて一体誰だ！無理心中でもする気か  
ちくしょー！」)

などと、遠のく意識の中思つていた…。

全ての物語は、ここから始まる

## 第1話 空からの来訪者（前書き）

今回は、主に主人公の説明みたいなものなので、軽く読む程度で大丈夫です。コメディーを読みたい人は、第2話からどうぞ。

## 第1話 空からの来訪者

私の平和な日常を返して！

第1話 人様の家を訪ねる時は、ドアから入るのが礼儀

「ただいま。」

誰もいない家へ言つ。最早これは、癖とも言える独り言だ。

今日は珍しく部活が休みなので、早く帰つて来れた。顧問がどーのこーのとか言ってたけど、詳しい事は知らない。

私は、母親は一年前に他界していて、父親は外国に出張中な為、このマンションの四階に一人暮らししている。無責任な両親だ。

まあ、毎月父から仕送りはたくさん来るし、わりとこう生活している。

少し寂しいけれど、こんな平穏な日々がいつまでも続いてほしいと思う。

起床・学校・部活・入浴・睡眠。そんな当たり前な事を幸せと感じる。

だが、その幸せはいつも簡単に崩れるのであった…。

「んん～？まだ5時かあ。何しようかな？」

そんな事をぼやいてると、窓が揺れてる。それは、風が強くなつてきた事を表していた。

(あ、洗濯物取り込まなきや！)

今日は、天気に恵まれていたので、たくさん干していたのだ。

一人暮らしという都合上、料理・掃除はもちろん、家事全般をやらなきゃいけない。かつなりめんどくさいが、慣れると上手くなるもので、今では専業主婦なみである。…なんか可哀想な女子高生だな私。

ベランダへ出ると、もう夕日が沈んでいた。最近暗くなるのが早い。

(ああ～めんべくセーーまあ、一人分だからまだマシだけど。)

干してあるものを、ひとつずつポンポンと部屋へ投げ入れる。

風が強く、少し肌寒い。

「よし、これで最後…ど。」

全てを取り込み、部屋へ入るのとした時だ。

空になにか見えた。

「いつたい何…ん?」

言いかけた時、思わず光景に目をみせる。

…いや、だつてあれ、じつち来てない?なんかだんだん近付いてる?  
?つていうか、なんか、なんか…………落ちてきてい……イイイイ  
イイイイイー?

(ひつ、ひと!?)

一瞬だけど、確かにそう見えた

受けとめるか!?.いやいやいや。無理。いくら私でも腕折れるつて!

でもいつも来るよ?見放すのか私!そんな心ない事できないー!そう

だよー大人になるんだ。お前ならできる。この腕で抜けとめなんだ！

さあ来いッ

…… つてやつぱ無理イイイイイー！

今までの思考時間、約1~5秒

(…あれ?)  
なかなか聞こえず、恐る恐る瞳を開ける。

なんとかここには、朱色の髪をツインテールにした美少女がポカン、  
と口を開け、じらじらを見ている。

(無傷…?)

あまりの驚きに声も出ない。

そんな私をよそに、その子の第一声がコレ。

『君、だあれ?』

私に言わせる。

## 第2話 訳あり異邦人

初めて人に殺意をおぼえました

第2話 言いたい事を言わせてくれないってムカつくよね

突然空から降つてきた未確認美少女。

そして現在事情聴取中。

「貴女は何者なの？」

「うひやー！びっくりした。空からまつさかさまってすゞくね？なんていうかすゞくね？」

「…何処から来たの?」

「え?あ、名前?ギン アスカっていうんだ。銀河の『銀』に、朱色の『朱』に『鳥』で、銀朱鳥。え?似合ってる?やだ、そんな本当の事言わないでよ 照れるじゃん!」

「……。」

「でも自分も驚いたよー。ここってアレでしょ?人間界つてやつ?自分トトリップしちゃったじゃん!初体験じゃん!ギネスじゃん!」

そろそろキレようかな?って思つてた時、アスカといいうらじい者から『トリップ』という単語が出てきた。

「ト、トリップ!?」

あまりに驚いて、つい彼女の肩を強く掴んでしまつた。

「あ、ごめ…」

「いやん!いくらウチが可愛いからって無理強いはよして

「……。」

「優しくしてくれね?」

キレイいい?

キレたい衝動をなんとか抑え、事情聴取再開（全然できてなかつたけど）。

「異世界？」

やつと説明する気になつた彼女から出でて来た言葉は、とてもファンタジーチックなものだった。

「うん。つていつても、君達からみたね。自分にしたら普通の世界だし。」

「そんなまさか…。」

有り得ない。だってこの21世紀、異世界なんていうのは、かなりのロマンチストか、余程の馬鹿じやない。

「まあ、信じられない気持ちも分かるよ。だって君達人間は、ウチらの事を知らないから。」

それってつまり…

「貴女達は私達の事を知つてるの？」

そう言つと、彼女はニヤ、と笑い

「自分は才色兼備だから」

と自信気に言つた。

(あんまり関係無い様な…。まあいいけど。)

朱鳥は才色兼備をなんかすごいものとしか理解してません

「それで、これからどうするの?」

これは、ずっと気になっていた事。だつて彼女はさつきから困つて  
る様子が無いし。

「それなら、大丈夫!自分は前向きだから」

それ大丈夫言わない。

戻れる方法でも知ってるんかい。

「まだ戻れる方法は分かんないけど…」

「うわ、なにこの子。エスパー?人の心読んだよ。

「とりあえずは、戻れるまでここに西湖を見つめようよ。」

(…は?)

「え~と、桃谷 沙良ちゃんね 16歳って同じ年じやん!」

私の名前・年齢を言った彼女の手には、いつ取ったのか生徒手帳が。

「ちよ、何勝手に見て…!」

「なんか一人暮らしつぽいし、家族関係とかのめんどくさい事無い  
じゃん！」

「だから、何言つて……」

「あ、一人暮らしつて事は、家事とか全部やつてんの？すごーい！  
尊敬するよ。」

「初対面の人に言われたくないんだけど！？じゃなくて……！」

「自分同居に憧れてたんだよー！丁度いいね」

「いや、丁度いいとかじやないで……一人で決めな……」

「つて事で、ようしくね」

「人の話聞けええええええ！」

波乱万丈な日々が始まる……

### 第3話 異世界の事情

誰でもいいから助けて！

第3話 人の話を聞く時は田で聞く…とか校長先生に言われなかつた？

「うへんーおいしい」

もう何度もになるのか、その台詞。

結局この不審者…もとい、異界人の押し（と言つ名の唯我独尊）に負け、もとの世界に戻れるまで同居する羽目になった。

そして今は、食事中。（当然だけど、私が作った）

「沙良ちゃんは料理が上手いんだね 嫁に欲しいよ」

「はいはい。ありがとう。」

まあ、褒められて悪い気はしないけど。華の女子高生がこんなに家事頑張つてゐるのだから、おいしいぐらい言つてもらわなきゃ。

…にしても、朱鳥は改めて見ると本当に綺麗な顔してゐる。睫毛は長いし、瞳は透き通つた銀色。朱色の髪に、白い肌がよく映えてる。言葉・行動は絶対に認めたくないけど、ものすごい美少女だ。

ずっと見てたせいか、朱鳥が私の視線に気付いた。

「何?見つめちゃつて。ウチに見惚れてた?」

からかう様な口調で言つてくれる。…外れてないけど。でもそんな事言えるはずないし(つていうかムカつく)、『はいそうです』と言う程バカでもない。

「そんなんじやないよ。ただ、異界人っていうわりとは、私達人間と変わんないなーって…。」

そう、これはさつきから不思議に思つてた事。だつて、違う世界から來たくらいだから、もつと姿形変わつてると思つ。

それを聞いた朱鳥は、たいして興味無さげに答えた。

「やうやう訳じやないよ。自分が人間に似てるだけで、他のやつらは変わつてるよ。」

(それって、いろんな人達がいるって事？)

そんな心の疑問に答える様に朱鳥は続けた。やっぱエスパーだ…。

「自分達の世界は、色々な種族が住んでるの。そうね、沙良ちゃん達も知ってるんで言うと…、狼男とか人魚とか？」

「お、狼男！？人魚！？」

「うん。」

あっけらかんと言つ朱鳥は、私がもう質問してこないと分かると、また食事を再開した。…ってそれ私のじやんー何当然の様に食べてんの「イツー？」

それについて、朱鳥の世界は思った以上に絵本の世界だ。ティーネーじゃあるまいし…。

「あ～！おいしかったー！」ちやつときま

考えこんでた隙に、全部食べ終わつたらしい。…本当に全部。

「つい私のぶんはーー！」

「す”いね、沙良ちゃんーまだ私と同じくらいの歳なのに料理できてー！」

「ちょっと何よコレー！質問ばっかして食べるの忘れてたよー。」

「自分はねー、家事が一切できないんだよ。マジで沙良の家に落ちて良かった」

「私の事見てるー?人の話聞こいつよーー!」

「これからも料理・洗濯・掃除・ウチの世話、頼んだよ」

「頼まれたくないわーー!!」

コイツ、もう出てこいつてくんないかな……

## 第4話 無駄な攻防

もしかして厄年？

第4話 ベッジソンとチエックインは間違えない様に

「…何してんの？」

お風呂から出で、やあ寝よひとつ寝室に来て見た光景。

私のベッドに寝そべって、深夜番組を見てる朱鳥。ツインテールはほどかれ、朱色の髪は背中まで届いてる。

「あつ、沙良ひさ。まつむの？自分まだこれ見てたーのな。

居候がいい御身分だ。本氣で頭痛がしてへる。

「だつたらビビングも手にレジあるよ。そつひで見てくれば？」

つてか、早く寝させて。

「えへへだつて沙良ひさもきつ寝ひせりでしょ。」

「そりゃ、ただでさえ今日は疲れたからね。」

毒たつぶつの言葉を吐く。このへりこの復讐はかなつまじこ。

「へえ？ 今日なんかあつたの？」

自覚無しかよ。嫌味も通じなつて恐えーな。

…やういえば、この娘は何処で寝るつもりなんだろう。

（布団とか無いんだけどなー。）

そう思つてた矢先、朱鳥はテレビを通してベッドの布団に入つたと  
で言った。

「仕方ない。いい子な自分はもう寝るよ。」

自分で言つた。しか

「何処で寝るつも…」

言い終える前に、ベッドから豪快なイビキが…。

「何勝手に寝てんのよー！ってか寝るの早ッ！何アンタ！ベッドインしたら、5秒でグー！？」

「冗談じゃない！…そう思つた私は、必死に朱鳥の体を揺らす。

「寝るな寝るな寝るなー！」

だいたいその美形顔でイビキかくな！夢壊されるわ！

「うん、何よ沙良ちゃん。今日は眠いから無理だつてえ。毎晩毎晩疲れるじやん。」

「誤解される様な事言つな！…そしてここで寝るな！」

耳元で叫ぶと、やつと朱鳥は迷惑そうにしながらも、しつこを見た。

「ベッド以外の何処で寝ろっていつのー？」

「知るか。床でもソファにでも寝そべってな。」

「うわ鬼だ悪魔だ。いいじゃん、このベッド大きいんだし。一緒に寝て不都合な事でもあるの？」

確かに私のベッドは大きい。人ふたりくらい簡単に寝れる。

でも、いくら姿が人だからって、この娘は未確認生物。一緒に寝るなんて校長の髪なみに危ないわ。（アレ、必死にカモフラージュし

てるところが、余計に痛いのよね。」

「どうしてもダメ……？」

「うう……。」

今の状況を説明すると、立っている私が寝ている朱鳥に見上げられ  
てる状態。

なので、この無駄に可愛い顔に、濡れた瞳で上目遣いでられるので…

「わ、わかったわ。一緒に寝ていーよ。」

「やったー！」

オイ、わっかの涙目でいた？

## 第5話 猩色族の条件

もつ全てが有り得ない

第5話 ファーストキスを幼稚園児ですると後悔しない?

結局ベッドに並んで寝る事に。枕の主導権は、なんとか私が握った。

「ねえ、今夜つて満月?」

も「寝たと思っていた朱鳥から、突然聞かれた。びっくりでイビキが聞こえないわけだ。

「いや、今日は三田円あたりだったと思つたけど……。」

「ふーん。」

（じゃあ、ギリギリだな。まあ、遅かれ早かれバレるけど。）

教えたわりには、薄い反応。理解不能……。

「なんかあるの？」

「うん。猩色族は、月によつて変わるかい。」

「セイシキゾク？」

聞いた事もないキーワードが出てきた。

「自分たちの種族の名前。見た目は、髪・瞳の色以外人間と同じ。あ、あとみんな美形！数少ない種族なんだよ。」

（あ、美形つて自覚あるんだ。そういうえば、朱鳥の正体聞いてなかつた。だけど、なんていうか……）

「異界人にしては、特徴少ないね。」

「そんなどないよ！猩色族だって特異体質だよ！」

「いついつ」と、朱鳥はムツ、とした口調で答えた。

「どたな？」

当然の疑問を口にすると、朱鳥はフツ、と笑い

「やのづか分かるよ。」

と、意味深に言つた。

「へえ……？」

正直気になつたけど、聞いたつて教えてくれなそつだから、私は何も言わなかつた。

この時聞いておけば良かつたといつのに。

すつかり寝静まつた部屋。イビキで眠れなそつ、と思つていたけど隣からは寝息しか聞こえてこない。

カーテン越しに光を感じて、私は目を開けた。

(ん…もう朝?)

眠たい目をこすり、近くにある時計を見た。

(なんだ、まだ5時半じゃん。もう少し寝よ……。)

そつ思い、朱鳥のほづへ寝返りをついた。

すると、田の前に綺麗な銀髪が…。

「銀髪ウーー？」

驚いて飛び起ると、隣には見知らぬ男が眠っていた。

(誰ーー?)

大声を出したせいか、その銀髪男は『ん…』と言しながら、田を覚ました。

ビクツツ

驚いた事に、瞳が朱色だった。しかも朱鳥の髪の色にそっくりな…。

(まさか…)

しばらくお互に見つめあつていたけど、不意にその男が有り得ない言葉を吐いた。

「あー、沙良おはよー。何? もう朝?」

「ーー。」

「へー、びしつた?」

不思議そうに見てくる銀髪くん。

この男、銀の髪に朱色の瞳。朱鳥とは逆…。しかも美形顔。そして、昨日朱鳥が言つてた特異体质。まさかとは思つけど、なんたつて、異界人だ。万が一もある。

私は思いきつて、聞いてみた。

「あ、朱鳥…？」

「ゴクリ、と唾を飲む。

「え？ 当たり前じゃん。何言つて…あ、」

言葉を途中で言いかけた。自分の姿に気付いたらしく。氣まずい沈黙が続いた。

そしてそれを破いたのは田の前の男だった。

「あーーもうバレたツツ！」

(…は?)

「一日でバレるとかつまらなー・マジ有り得ねえしー。」

「あ、朱鳥…。」

呆気にとられた。だつて見た田だけじゃなく、声、口調も違つ。

「あ、驚いてる驚いてる そ、これが猩色族の特異体质の正体。昼と夜で性別が変わるんだ。ついでに今は朱鳥じゃなくて銀。」

性別が？確かにある意味す“い。しかも名前まで変わるのか。でも、そんなヤツと同居つてかなりマズインじゃ…。

「ま、こんな俺だけじょろしく」

そう言って、男版朱鳥、もとい銀は私の唇に軽くキスした。

(…え)

「いただき」

ポカーン、としている私にイタズラに笑う銀。

怒りボルテージ上昇。

パンッ！と鈍い音が響いた。

## 第6話 変人の思考（前書き）

今回は、朱鳥視点で書きました。朱鳥の馬鹿さが、ここで更に分か  
ると思います（笑）

## 第6話 変人の思考

とりあえず暇しなそづ

第6話 セクハラとは、セクシャルハラスメントの略

殴られた頬は、もう痛みはなくなった。赤みや、腫れないのは治

癒能力の高い自分たちの体质。

ついでに今、朝食中なんだけど…、沙良ちやんがずっとこいつらを見てくんな。体はもう女なのになー。

「さつきあんな事あったから、照れちゃってるんだね」

あ、睨まれた。恐いって。

アレだ、蛇に睨まれたナメクジ状態。ん?なんか違う?まあいいや(オイ)

「そんな怒らないでよ~。自分、男になるとちょっと性格変わっちゃうつていうか…。それに、キスくらいでそんな怒んなくとも」

「キスくらい?」

あ、青筋出てる。」りや、かなりキレてるね~。余計な事口ばしらない様に、気を付けなきや!

にしても、クールに見えてツッコミ激しかったり、経験豊富そうなのにキスマジギレって…ギャップでも狙ってるのかチクシヨー。

「んなもん狙つてなー!…」

アレ?なんで心の声聞こえてるの?

「何が心の声だあ!バツチリ言つちやつてるからああー!」

「あひひ、つー。」

「どうやら全部しゃべってたらしい。うへん、自分の素直さが仇になつちやつたわ。これだからいい女は困る〜〜〜

「何それ！ポジティブにも程があるでしょ！？」

「あ、また私の心を覗いたわね。酷い、いくら私達が『ひゅう関係だからって…。もう離婚よ！実家に帰つていただきわ！』

「『ひゅう関係つて、ひゅう関係！？つてか私が帰るの…？』

沙良ちゃんは、カシヤンツ！と、食器を乱暴に水道へ置いた。そして、振り向き（お、見返り美人…）

「自分のは自分で片付けてね。」

と言い残して、行つちやつた。

「つて、何処行くの？ダメよそつちはーそつちには、地獄の番犬『ケロケロベル』が…！それでも貴方は行くと言つのー…？」

「……。」

「冗談です。すいません。自分調子のつてました。」

そんな睨まなくとも！沙良ちゃんガンつけ強すぎだから！何その眼力？目からビームでも出そうなんだけどー…！

睨むだけ睨んで、沙良ちゃんは自分の部屋へと入つていった。

なんかさ、閉められたドアつて開けたくない？なるよねなる。

つて事で

オープン・ザ・ドア！

「沙良ちゃん何して…」

ガンッ…

痛ああああああああああ！

ドアを開けた瞬間、私のブリチーな額になんかぶつかったんだけどー。

「ちよつ、マジ痛い。泣くかも。」

落ちた物を見ると、それは田舎まし時計だった。うわ、これ角当たつたな。

「ちよつと沙良ちゃん！ いきなり時計投げるってどうひつ事！？ そんな子に育てた覚えはありません！」

「育てられた覚えもないわあーーー！」

そつまつていのんな物を投げてくる沙良ちゃん。危ないからーーいくら治癒能力高いって言つても痛いんだよー！？

「何ーなんなのー？自分が何したっていつのーーー！」

「着替え中だボケーーーー！」

え、マジで？ あらヤダラッキーハプニング

「何言つてんの沙良ちゃんvv自分ら女同士じゃない わあ、心も体もドーンと見せ…」

「セクハラ反対イイイイイ！」

あ、これ貯金箱。

顔面に当たるコンマ0・一秒前、確かに見えた。

## 第7話 日常の破壊

「幸せってなんだけ?」

「あー、ヒマーヒマ過ぎて死ぬ……」  
第7話 ロンプレックスは、とりあえずチャームポイントって言つとく

沙良ちゃんは学校へ行ってしまった。怪我負わせた挙げ句（もひり治つたけど）、置き去りなんて酷い！

「なにが『ここから一歩も出ないでね…』…よ。失礼しちゃうわー。」

自分は退屈が世の中で嫌いなものベスト3に入るんだよー。それを知らずに行くとは…、悪魔だ！

今少し違和感を感じた君！頭いいね

「え？なんかおかしい？」

と思った人、もひとつ本読めや。

「一歩も出ぬな…か。」

ウチは、『ん~』と背伸びをひとつして、玄関のドアに手をかけた。

「わ~言われると、出たくなるもんだね。でも、何処に行こうかな？」

外へ出ると、風が少し冷たかった。自分の着てる服は、人間界になると露出度が高い。

「…あ、いい」と思いついにカモ

沙良ちゃんが悲鳴をあげるのが頭に浮かび、つい、にやけてしまつ。

はたから見たら、明らかに怪しい…。//ステリアスなどころも、自分のチャームポイントのひとつよ

「せうとなつたら善は急げ！」

まだ肌寒い朝、スキップで目的地へとかけて行く。

…といろ変わつて教室

「沙良おはよ～う！」

緩いソープラノが響く。それだけで誰だか分かつた。

「姫乃…。」

振り向くと、やつぱり声の正体は姫乃だつた。姫乃は私の幼馴染みで、身長148センチとかなり小柄だけど、これでも同い年。私は背が高いから、いつも姉妹に間違いられる。

「どうしたの？顔悪いよ。」

顔色つて言いたいのね…。あえてシッこまないでおへわ。

「実は、昨日空から」

(あれ、ちょっと待て。これって言つていの?)

「空から?」

不思議そうに、見つめてくる姫乃。

(どうしよう。こんな話したら、『精神科紹介しようか?』なんて  
言われるわ!)

「え~? 何何? 続きは?」

私の気持ちも知らずに、迫つてくる姫乃。幼馴染みなら察しろ!!

「いや、だからね。空からケロケロベルが…  
(ヤバッッ!! 朱鳥のがうつった!)」

「ケロケロベル?」

(言い訳できねええええええええええ!!)

『キーンコーンカーンコーン、キーンコーンカーンコーン』

「あ、チャイムなっちゃった。じゃあ私自分の席行くね。」

ナ、ナイスタイミング

なんとかピンチから、逃れられた。でも、きっと、ってか絶対次の  
休み時間聞いてくるわ…。

(全部アソツのせいだ…。)

ぐつたりする。なんかもう、やつてらんない。

(何故あの時、私は追い出さなかつたの? あー後悔! )

まあ、学校にいる間は大丈夫よね(アイツが家で、何してるか心配  
だけど)。

うーん、まさに砂漠の中のオアシス 今までだるかつた学校が、休  
息の場になつたわ。

ガラツ!!

「ハロー エヴリワン 転校生の朱鳥でーす!!」

休息の場に……

## 第8話 不安と葛藤

何? 私に死ねって言いつの?

第8話 人は中身とか言つヤツにかぎって、可愛い彼女がいたりする

「髪きれいだね。何人?」

「名前が『銀朱鳥』だもん ある意味ハーフだよ。」

「日本語上手だね！」

「才色兼備だからvvv」

「何処から来たの？」

「異世界」

騒がしい教室。それは突然の転校生のせい。その上、美少女だから余計にだ。つてかアイツ何しに来たの？

「わ～！朱鳥ちゃんモテモテだね。隣のクラスの子まで来てるよ～」

「なんである異次元な答えに、誰もツッこまないの？何？顔が良ければ、全てが許されるの？」

「わあー沙良、毒舌w」

そりや、毒も吐きたくなる。私の休息の場を、またひとつアイツは消したんだから。嫌がらせか？隅々まで幸せ奪う気か？

（早退しようかな…。いや、でも朱鳥をひとり学校に残すほうが、苦痛かも。）

そんな事を、ひとり悶々と考えていた時、予想してた恐ろしい事が起こった。

「朱鳥ちゃんは、何処に住んでるの？」

「……聞いた――――！」

（いや、これはさすがに正直に言わないよね？少しは考えてるよね？誤魔化せよ？誤魔化すよな？）

「沙良ちゃんの家にいそ…モガツツ」

言こきる前に、朱鳥の口を抑え、拉致った私。ナイス瞬発力！

（……うん、分かってたよ。アンタが常識通じないくらい馬鹿だつて事。そして、そんなアンタを信じた私は、それ以上の馬鹿だつて。）

痛いくらいの視線を浴びながら、私はマッハ並の速さで教室を離れた。

校舎裏まで来たところで、朱鳥の口を抑えていた手を放した。

「ふはっ！何するのを沙良ちゃん…！」

案の定、文句を言つ朱鳥。

「このちのセリフ。アンタ私の家に、居候してるので言こそつこなつたでしょ。」

「へー、ひん」

「うんじゃない！…そんなスキャンダルいらなーのよー。つていうか、なんでアンタ学校に来てるのー？」

嗚呼もう、私叫んでばかりじゃない。その内のど血漫大会でね。のど血漫つていっても、歌じやなくて声量のだけど。

「だつて沙良ちゃん、ウチの事置いてくんだもん。もしかしてアレ放置プレイ？やうやつて私の事じらすんだ。このサディスト…！」

あ、なんだろ、ひ口こ

「でも甘いわね！私はこいつ見えてタフなのよー？そのへりこじや匪しないんだからつ！」

なんていうか、すうい殴りたい衝動にかられるんですけど。

「…とにかく、アンタすぐ帰りなさい。此処に居られたら、心臓もたないわ。」

「それはつまり、ウチにこどもくと…」

「あ？」

「嘘です、スママセン。」

だんだん黙らせる方法、わかってきたかも。

「でも、今更無理だよ。転校手続きしちゃったし。」

なんができるんだよ

「そのへんは、先生の記憶を軽くいじつて」

「だから人の心読むなあーーっ！アンタ何やつたりやつてるのーー？現実世界で、漫画みたいな事やめようつー！」

「魔法くらーい、朝飯前ーむしろ夜食前セツ！」

「聞いてないし。しかもすゞいんだか微妙！」

結局噛み合わない。いや、毎度のことだけどね……。

「沙良？」

「ひ、姫乃……。」

緩いソープラノ声。なんてバッドタイミング。

汗があらわる毛穴なら、噴き出す心地がした。

(ヤバイ！『何ふたりとも、ファンタジックな会話してるの？精神科紹介しようか？つていつか死ねば？』的な展開に……)

「朱鳥ちゃん魔法使いなの？すゞーい！」

そつきたか

「沙良ちやん、自分で寝められちゃつたーへつ

黙れ

## 第9話 事情聴取

いい加減泣きたくなる

第9話 美少女に可愛いつて言われると、なんでムカつくんだろう

事情聴取第2回戦開始

「どうやって転校生になつたの？」

「（つすら髪の人の記憶をいじりました）

「（…校長か）その制服は？」

「此處に来る途中、パンかじって走つてた子のを奪つ…貰いました

「

「…家の鍵は？」

「結界はつてきましたvvv」

「…なにか言いたい事は？」

「ありませんです隊長！」

「…姫乃。」

「何？沙良。」

「殺意わかない？」

「え～？」こんな可愛くて面白いのに？」

「いやん、そんな当たり前の事」

「でも、びっくりだなあ。朱鳥ちゃんが異世界の住人で、その上沙良の家に居候してゐるなんて…。いいなあ、楽しそうー。」

「じゃあ、姫乃が泊めてあげなよ。私は一田田にしてダウンよ。」

本当にそうしてほしい。あ、でもこの変態と一緒に住ませるのは、姫乃の身が危ないかも。…いや、この娘なら全部天然ボケで乗りきれるか。

「そりしたいのは、山々だけぞ…」

「山々つて…、どんだけ苦労するか知らないから言えるのよー。」

「お母様がなあ…、異文化受けつけないから。朱鳥ちゃん見た目派手だし。」

「ああ～、白鳥家の家元だもんね。」

そう。姫乃は名家の令嬢だつたりする。母親は茶道の家元、父親は有名な物書き。だから、姫乃はああ見えて礼儀正しい。あの天然とロマンチストが消えれば、大和撫子なのに。

「自分は、沙良ちゃんと一緒に住みたいッス！」

ピシッ、と敬礼する朱鳥。

私は違うから。一秒でも早く、アンタと離れたいから。

「沙良ちゃん好かれてるじやん」

「嬉しくないし。」

スッパリと言いきる。あ、朱鳥が体育座りして泣いてる。まあいいか。

「でも沙良、なんでそんなに嫌がるの? こんな美少女と同居つて、田の保養じゃん!」

「姫乃、私の話聞いてた? コイツ夜になると馬になるとのよー言葉にもしたくないけど、同棲じゃない!」

「でも、もしなんかあっても沙良は力あるじゃん。そういうんの男子より。」

「自分に怪力は通じないよ? 自分魔法使えるから」

「いきなり口挟むな。いつのまに立ち直ったんだよ。もっと突き刺さる事言えよかつた。」

「えー、やっぱそうなんだ。でも魔法使いじゃないんでしょ?」

「異世界の者は、皆使えるの。自分ら猩色族の特徴は、性別変化と丈夫さとの美貌! 華奢に見えて、強いよ。生命力・治癒能力高いし。」

あ、私の思考はシカト? こうこう時は心読んでくれないのね。便利だなオイ。

しかも、その異世界豆知識、初耳なんだけど。

「ところで沙良。こんな時に言つのもなんだけど、もう2時間目終わつたかな?」

「……あ。」

そう言えば、必死で気付かなかつたけど休み時間に飛び出してきた

わけで、今頃は授業の終盤…。

「ねえ沙良。提案なんだけど、朱鳥ちゃんが沙良の家に居候している事、皆に言つてもいいんじゃないかな?」

「えつー!私は嫌よー?」

「だからさ、沙良と朱鳥ちゃんは親戚とか言つて…。そうすれば、別に変じやないし。」

妙に説得力ある提案。確かに、なんて思ひやう。

「お願い沙良ちゃんー!自分でヒマ過ぎて死んじゃうよー!?

うわ、出たウルウル上田使い。本当にそれヤバイからー!動悸激しくなるからー!

「…正体バレるんじゃないわよ。」

「沙良ちゃん大好きいーーー!」

結局私が白旗か…。

「やつぱね田使こきくね(妖笑)」

計算！？

## 第10話 一二面性

彼女の事、欲しくなつてきた

第10話 アサリの貝柱つて食べない人多いよね。…まあ、どうでもいいんだけど

あの日以来、朱鳥は私の従姉妹として、モテモテスクールライフを楽しんでる。ああウザイ。

それと、最近知った猩色族の体質について。

なんでも、満月に近付く程男でいる時間が長くなるらしい。逆に、新月に近い程女でいる時間が多いとの事。

今日は満月に近いから、もしもの為に学校を休ませた。おかげで、今日は最高に楽しい一日だった……！

そして、帰つてきたりこきなつこの一言。

「自分も学校行きたかった！」

授業全て寝てるヤツが言つ言葉か。ってか、コイツ本当に何しに来てるんだっけ？

なんか答えるのも面倒だったから、とりあえずシカトした。その後色々騒いでたけど、それもシカトしたら泣き始めた。

あまりにウザイから、チヨコレートあげたら、土下座して感謝された。

：最近扱い慣れてきたな。

「ねえ、沙良。風呂次入つていいよ。」

「ん、わかつ……、ええ！？」

男になつてゐし！

「いや、びっくりしたよ。体洗つてる途中で変わらんだから。胸ペタンコなるし、下は『放送禁止、自主規制しや。』

美形顔でとんでもない事言ひの前に止めた。この歩くセクハラめ。

「じゃあ俺先に寝るね。」

そう言つて、ベッドに寝そべる朱鳥。あ、今は銀か。ややこしいんだよチクシヨー。

……はい。もう分かる人もいると思いますが、ひとつベッドで寝てますよ。朱鳥だらうと銀だらうと。まあ、セクハラ発言するわりに手は出してこないし。

（いや、でも一緒に寝てるとか…。嗚呼、天国の母様、ふしだらな娘でごめんなさい。）

「風呂入らないの？あ、独りじゃ寂しいとか？なんなら、俺とい『入つてきまーす！』

一刀両断して、銀の側をマツハ5で離れた。…マジでキモいんだもん。

あー、でも銀の接し方はよく分からん。だって朱鳥みたいに馬鹿じやないし。

（どこまで本気なのか分かんない…。本当に同一人物？？）

ため息が自然といざれる。

「じゅ、じゅあお風呂入つてへるね。」

「いりあつくつ。」

「シココと微笑む銀。

(わ...//)

「...ヒツした?..」

「な、なんでもない!..」

そう叫んで、風呂場へと光速並の速さで走る。

(うわ~!!一瞬ときめいたよ、かなりの不覚!アレは朱鳥なんだよ~。夜はどんなにかつこよくても、あの朱鳥なんだよ!~自分を持つ沙良!~)

田を覚ます様に、熱い湯船へ飛びこんだ。

「…頬染めちゃって、かわいいなあ。」

本当は、戻れる方法が分かるまでのつもりだったけど…どうしようかな。

「犬も三日飼えば、情がうつるってか。」

犬は君と俺、どっちかな？

## 第11話 満月のチカラ

悪夢どこのか地獄だわ

第11話 休日つて休む日つて書くのに、平日より疲れたぞ

事件は起つた

「…ねえ。」

「何? 沙良。」

「今11時だよ。」

「知ってるけど。」

「猩色族つて、昼と夜で性別変わるんだよね?」

二〇

「じゃあ、なんでもまだ男なんだよーーー?」

そう、アス…じゃない、銀はもう脇近くなつたといふのに、今だに男なのだ。

話違うじゃん！

「ん?ああ、今日は満月だからね。一寸の姿だよ。」

「嘘!?止めてよ[冗談じやない!]」

「うん、冗談じゃないよ。」

「え、いや、まあそつなんだけど…。」

何コイツ天然！？相手しにくいんだけどビツ。

「ところで昼食まだ？俺松坂牛がいいな。」

あはは テメエ 独りで 食つてこい。

「最近沙良の手作りも飽きてきたしな〜。」

殺つていい？殺つていい！？

「あ、そうだ！たまには外食しよ！」

は？

「いいよな、沙良。」

ぐはっ！眩しい！笑顔が眩しいよ銀！直視できねエエエエエエエエエエエエ

エー！

「つて事で行いりやー！」

「えつ、ちよつ……！」

私は腕を掴まれ、外へと引っ張られた。

(すごい力あるな。振りほどけない。…やつぱり男なんだ。)

改めてそう認識すると、頬が熱くなる。こんな美形に手を取られるつて、思えばすごいじゃない。つていうか、これってアレ？デートつてやつ？え、え、ええええええええええええ！？

私と銀は喫茶店に来た。いや、正しく言えば連れて来られた。つていうか、いつまで手繫いでるのよー！

「いらっしゃいませ。何め……」

現れたウェイトレスはお決まりの言葉を途切れさせ、真っ赤な顔して銀を見つめる。…みどれる、の方が合ひてるか。まあ、気持ちも分からぬないけど。

「二人。」

「あ、は、はい！」

銀の声で我に返つたらしく、席に案内という仕事をするウェイトレス。

私達が席に着いても、ウェイトレスはチラチラ見てくる。恥じらいっちゃって、可愛いなあ。ん？アレ？なんか親父くさい？

つてか、なんか視線感じるんだけど。ただでさえ変わった髪と瞳なのに、美形だから尚更見られるよ銀。

「こんなところクラスメイトに見られたら大変だわ……。」

「なんで？彼氏つて紹介してよ。」

「誰がアンタみたいな奴、もとは女じゃない。」

そう冷たく吐き捨てるど、銀はおや？と、首をかしげる。私別に変な事言つてないよね！？

「心外だなあ。沙良はいつも俺の事、女と見てたのか？」

「そ、そんな事」

つていうか、顔近い！だいたい普通食事するなら前後に座るんじゃないの！？なんでコイツは隣に座つてるッ！

「確かに俺はまた明日から女でいる時間が長いけど、本当は女とか男とかじゃないよ。」

「えつと……。」

「昼は女で夜は男。同一人物だけビ、性別ははつきり区切られてるぞ。」

そう言って銀は、顔を更に近付かせ私の耳もとで囁く。

「だからちゃんと男として見ろよ。」

「ツー！」

あまりに熱っぽい声だから、体中の温度が上がる。きっと今の私の顔は、真っ赤なんだろう。

（銀と暮らすには、顔色を制御する術を覚えなきや…。）

我ながら情けない。でも、あの朱い瞳で見つめられると、頭がぼーとしてしまうのだ。

少し離れた銀を、チラリと見上げる。一タ一タと、人の悪い笑顔を浮かべてた。

「…何がおかしいのよ。」

「いや、可愛いなと思って。」

「はあ！？」

「で、俺の説明理解した？」

「3分の1くらいなら。なんか私には難しい。」

ため息をつきながら言つ。だつていまいち分からぬ。つまり銀は男なのよね？うーん、中途半端な奴。異界人だから仕方ないのかもしないけど。

「ようは朱鳥は女で、銀は男なんだよ。簡単な事だろ？」

「……簡単だかなんだか知らないけど、この手は何？」

今の状況、銀に肩抱かれてます。しかも、もつ片方の手は私のももに…。朱鳥はともかく、アンタがやつたら完全、犯罪だよ！猥褻行為で訴えるつちゅーの…！

「親睦を深める為には、スキンシップが一番。」

「アンタの場合、ただのセクハラよ！？」

「堅い」と言わざに「

「ちょっと、いい加減　！」

さすがに気持ち悪いので、水をぶっかけようとしたとき、

「沙良？」

私を呼ぶ声が。

クラスメイトだなあ、とか  
親しい奴だなあ、とか  
男子だよなあ、とか

そんな考えがマッハで脳をかけ巡った。

銀朱鳥に私の幸運、吸い取られてない？

## 第11話 満月のチカラ（後書き）

激甘ツツ！…しかもコメテイーじゃないし！糖分多すぎました。虫歯になつた人、ごめんなさいm(ーー)m  
次回も恋愛要素多いかも…

## 第1-2話 命名、変態銀頭

「レ、殴る権利あるよね？」

第1-2話　主婦は月9より毎ドラがお好き

「沙良、何してんのだ？それにこの人…誰？」

逃げる  
誤魔化す  
他人のフリ  
そんな事聞けない体にする  
沙良は誤魔化すを選んだ！

「！」「これは……！」

「どーも、沙良とは深夜に会つような密な関k「テタラメ言つてん  
じやねHNHNHNH！－！」

私は握つていたグラスを銀にぶっかけた。いや、なんていうか、つ  
い反射的に……。

うわ、店員めっちゃ見てる。つてか、客もみんな見てるよ。何この  
空気、マジ気まずいんですけど。

ギロリと銀を睨む。だって悪いのコイツじゃん…さつきの発言は精  
神的セクハラよ…！

「仕方ないなあ…。」

仕方ないつて何!?なんか私が悪いみたいじゃん!え、私悪くない  
よね?うん、悪くない悪く:ないよね!?

「逃げちゃお」

「え?」

二カツ、と笑つた銀は私の手をとり喫茶店の外へと走る。

え、これ逃げていい場面!?

そんな私の気持ちも露知らず。銀は走り続けた。

…天国の母をと、沙良はとうとう犯罪者になってしまいました。

「ハア、ハア、ハア、ハア もう無理。少しも動けない。」

「大丈夫？」

「全然大丈夫じゃないわよ！だいたいなに考え「えっと、お取り込み中悪いんだけど…。」

遠慮がちな声に振り返る。

忘れてた！！

「じゅ、純…。」

「何？沙良の友達？」

「あ、幼馴染みの水無月 純です！いつも沙良がお世話になつてます！」

「いや、別になつてないからね？むしろ世話してるからね？」

「そうそう。夜まで世話をしてくれひやつて」

「してないから! そんな事してないから! …ちよ、純信じないでよ!  
!?」

「えつと…どうこう関係?」

いや、まあもつともな疑問ね。こんな容姿の人なかなかいないもんね。

チラ、と銀を横目で見ると、丁度目が合った。銀は純に気付かれないよう私にウインクする。

(任せて… って事かな?)

「はじめまして、銀つていいます。沙良とは遠い親戚みたいなもので、見ての通りハーフ。よろしく。えつと…純?」

うわーよくそんな嘘スラスラ言えるな。朱鳥だつたら、普通に真実+勝手な妄想言いそう…。コイツ本当に同一人物?

「え? 銀つて… 確か沙良の従姉妹も銀じゃなかつた?」

墓穴! -!

「どうする銀! ?」

裾を軽く引っ張つて、小声で聞いた。

「どうしようか」

考えてないんかい！！

「ぐ、偶然よ偶然！それに朱鳥は名字が銀だし！ねー？」

「え？あ、うん。」

ああ、今まで嘘ついたよー！」めん純、幼馴染み歴13年なのに…！

「そりなんだ。沙良つてハーフの親戚いっぱい居たんだね、知らなかつた。」

そりやそうだ。実際居ねえもん。

こんな無理矢理な嘘信じてくれる貴方が愛しいッス。

(ふう、でもなんとか誤魔化せたわ。でも銀を見られるとは、しかも純に…。ああもう！外出なんかしなきゃ良かつた…)

そんな事を考へてると、不意に後ろから肩を掴まれた。

「ふえ？ つて何やつてる銀！」

今私の体勢、銀が私の肩を掴み、しかも私の頭に顔を乗せてる。銀は背が高いからジャストサイズ。

(「、これつて抱きつかれてるみたい…！」)

「それじゃ、俺たちこれからデートだからまたね」

「なつ、なに言つ…！」

私の抗議も聞かず、銀は私を横抱き（つまりお姫さまだっこ）にて、純に背を見せた。

「ちよつと銀ー下ろしてーー！」

「ダメー！」

「~~~~ツーーー！」

一通り暴れたけど効果なし。少しくらい手加減しなさいよ！  
純の目も気になつたけど、私は今の状況に精一杯。このスケコマシ  
め！

（こんな街中姫だつこつて、かなりのバカップルでもやらない！痛  
いくらい視線くるし！穴があつたら入りたい……！）

「沙良純情だねえ～。」

「黙れセクハラ銀頭！」

その後は『飯食べたり、映画見たりした。でも『最後にホテル行かない？』とかほざくから銀だけ路地裏に捨ててきた。

## 第1-2話 命名、変態銀頭（後書き）

次回からは朱鳥なので、またギャグモード

## 第13話 血の繋がり

C o m e B a c k 平穏な日々

第13話 これが世間で言つセクシーダイナマイト？

「…………。」

ベットに寝ながらも、朝の陽の光が入ってきたのを感じた。だけど、それと共に息苦しさが

（胸が、重い。なんか乗ってる…？）

覚醒しきっていない頭で考える。その圧迫感で、だんだんと脳が覚めてきた。

プチ、プチとすぐ上で音がする。聞いた事あるような、そう。例え

ばボタンをはずす音。

「つてええー？朱鳥なにやつて――」

一気に目が覚める。ガバッ！と上半身だけ起こすと、私に馬乗りしていたのは朱鳥じゃなく

「だ、だれ……？」

そこにいたのは、見知らぬ美人。長い艶やかな紫の髪を垂らし、翠色の瞳をしてる。着ている服は、大きく胸もどが空いたワンピース。この角度だと谷間がくつきり見える。スリットは太股ギリギリまできていて、教育上よろしく無い格好だ。ＮＨＫ出るのは諦めるべきね。

いや、そんな事より何が大変かって、その人が私の服を脱がしてるのがよ。

「あら、起きちゃつた？夜這い失敗。」

「なつ、なに言つ……」

今サラリとすゞ事言つたよね？夜這いとかなんとか…夜這い！？

頭をフル回転させても、この状況は理解できない。つてか、できる人はどれだけ順応性あるんだ。ああ、エジソン助けて。99%の成分が努力でできた人。

「あ、朱鳥…起きて。」

隣で寝てる朱鳥を揺らす。こんな奴より、バッタに助けを求めるほうがずっと良さそうに思えたけど、生憎近くにいるのはバッタ以下の「トイシベリ」。

「ん~、ダメだよ沙良ちゃん。私達はまだ早いって……」

「どんな夢見てんだ!」

ガンッ!

「痛あッッ!!」

とつあえずグーで殴った。私のランニング内でのミジンコ以下になつた朱鳥が奇声をあげる。

「ああ、イイといひだつたのこ……。」

(まだ言つか……)

顔を歪めながらも、朱鳥は瞳を開けてくれた(開けさせたのほうが正しいが)。

「一体どうしたのや、沙良ちゃん……」

一時停止する朱鳥。いや、わかるよ。そりや驚くよね、見知らぬ人が私を襲つてゐるのだから。

「紫音?」

えつーなに?シオン!?

「ふふ、久しぶりね、朱鳥。」

つてええ！？ちょっと、ついていけないんだけど！え、何？朱鳥とこの美人は

「知り合い、なの……？」

コクリ、と一人は頷いた。

つていうか、いい加減重いんですけど。

「し、姉妹！？」

朝食しながら、私は一人の関係を聞いた。

「ええ。朱鳥の姉の紫音っていうの。さつきは『めんね』、貴方の寝顔が可愛くて！」

(…朱鳥と同じ血筋ね。本気でやるあたり、タチ悪いけど。)

「でも、どうして紫音が人間界に居るの？」

相変わらずかなりの『飯を食べながら（食費ヤバイな）、朱鳥が問

う。

そう言えれば、朱鳥はもともと異界人だった。偶然トリップしてきて、戻れるまでここに住むって事になってる。

アレ？でも、異界人の紫音さんがここに来れたって事は、もう朱鳥は帰れるの？

そんな、そんなの

嬉しそうなじやないッvvv...!

## 第14話 帰宅願い

神様あなたを恨みます

第14話 登れたのに下りれないとかベタな

突如やつてきた朱鳥の姉、紫美人『紫音』さん。その時私の脳内でたくさんの等式が一瞬で浮かんだ。

紫音は朱鳥の姉＝異世界出身

異世界出身＝異世界から来た

異世界から来た＝行く事も可能

行く事も可能＝異世界に戻れる

異世界に戻れる＝朱鳥が帰れる

「…………。」

朱鳥が帰れる=「ここには平和な日々

「なんて素敵なの！？」

導かれた答えに感動した私は、心中だけではそれを抑えられず思わず立ちあがってしまった。その衝撃に、イスが豪快な音をたて後ろに倒れる。

「…どうしたの沙良ちゃん？ そんなに興奮しちゃって。」

「あ、いや…」

不思議そうに首をかしげる朱鳥。 私の心中は察してないみたいだけど、心臓がはね、歯切れが悪くなる。

「フフ、やつと身体がうずいてきた？ それもう発生するかと思つたわ。」

「はー？」

ちょっとこの美人さん私に何したの！？ 薬でも盛ったわけ！？ それともここはファンタジックに魔法！？

「ついで、そんな事より！ なんで紫音さんが私の部屋にいるの！？」

ずっと聞いたかった疑問をぶつける。 さうよ、変態発言にシッコリ

いれてる場合じやなー。

私の疑問を聞いた紫音さんは片眉をあげ『ああ……』、と顎に舌をあてがう。

次に出でてくる言葉をじつと待つ私の鼓動は、ドクドクといづれや。

「湖に落ちて、気がついたことにいたの」

紫音さんさりと笑顔で囁く。

「湖？ 気がついたらいた？」

なんのゲームだ！！

「やしたら可愛い女の子が寝てたから、つい欲情しちゃって」

「うわああー！ までは聞いてないーー！」

「ダメだよ紫音、沙良ちやんは自分ひとりでなんだからーー。」

頬をふくらませて、嘘を平氣遣つ朱鳥。一回樹海に捨ててこよっかな。朱鳥なら死なない気がする。

つて、ちょっと待つて。気がついたらここにたつて事は、来たくて来たわけじゃないんだよね。じゃあ戻ることはできなつて事？

……その瞬間私は足もとが崩れ落ちる錯覚に陥りました（△さんの証言）……

「沙良ちゃん、なんで泣いてるのー。」

（証言）……

やつと見つけた光を簡単に崩されたからよッー！

ああ、うつむくと涙が床に零れてく。そつだ、こんな時こそあの歌を…！

上をむう～いて　あーるこお～　涙がーこぼれえないよつこ～（泣）

「沙良ちゃんツツコミ役がボケると痛いよ。」

黙れ年中ボケ朱色。たまには休暇しろ

はあ、もうボロボロだわ…。一度期待したことにより、裏切られたダメージ倍増。人はこれを『だつたら最初から知らなきゃよかつた！効果』と呼ぶ。

そんなものありません

「ねえ、私も異世界に戻れるまで、ここにいていい…？」

涙で濡れた私の頬を両手で包み、尋ねてくる紫音さん。

ちょつ、その艶のある表情でアップはキツイですって…なんか火照ってきたし！

「え、えと、でも寝るスペースが…」

さすがにベッド3人は狭いだろうし…、となお近付く目の前の美人にだじろぎながら、必死に言葉を探す。目線が自然と泳いでしまうんだけど…

「ふふ、それなら大丈夫。私ソファで充分よ。」

「で、でも……」

「 駄目かしら?」

「うつ……そんな綺麗な若草色の瞳を濡らして、真っ正面から見つめられると……！」

「わ、かりました。戻るまで、なら……。」

了承してしまった私。どうやら涙田に弱いらしいです（朱鳥参照）

「ありがとう沙良ちゃん!」

「ひゃあ……」

いきなり抱き締められた；  
私免疫ないから動搖するよ……！

「なんか騒がしくなつたうだなあ。」

私達を見て、そう呟く朱鳥。

原因のお前が言つな。

「……まあいいか。あ、ねえ！提案なんだけど別に紫音ソファで寝なくて、自分と沙良ちゃんが抱き締めあえば紫音もベッドに入フギヤア！！！」

初めて人に右ストレートをきめた瞬間だった。

天国のお母さん、沙良は今日も元氣です。

第14話 帰宅願い（後書き）

久しぶりの更新…！ずいぶん長い間放置しておりすいませんでした  
！！

## 第15話 二重人格

プラスマイナスゼロ？

第15話 分からなくてもとりあえず『うん』って言ひとけ

またいつもの様に、田を覚ます。だけど今田は朝田の光ではなく、キッチンからただよう香ばしい匂いの所為だった。

(「コーヒー……トースト……？」)

香りのもとを予想しながら、隣に寝る異界人を見る。満月を過ぎたせいか、もう女の子に戻っていた。少しホツとして、傍らに置いた携帯を見ると、時刻は6時半。

(朝食作らなきゃ……アレ？でもこの香り……アレ？)

寝惚けていた意識が、だんだんとクリアになる。私は異常に気付いた。

「パン…！」

急いで飛び起き、かなり乱暴に扉を開ける。なにか変な音がしたが、この際気にしていられない。

（私以外に誰が朝食を作るつていうの…？）

すっかり目覚めた頭は、冷静になんてなつてくれない。驚きの原因を突き止めるべく、私はリビングに走った。

「あ、おはようございます。」

「…おはようございます？」

私が見たものは、13・14くらいの少年がコーヒーを煎れてる姿だった。

「パンとサラダ作ったので、じつぞ食べて下さい。あ、コーヒー砂糖ありますか？」

「はあ、じつも…じゃあミルクだけ……。」

私はそう頼んで、椅子に座り、並べられた食事を、口に運ぶ。

「……おこし。」

つこ言葉に出てしまった程それは美味しかった。私より料理の才能あります。主婦業女子高生のプライドが傷つき軽くショック。

「本当ですか？口にあつてよかったです コーヒードリブル。」

「ありがとうございます。」

満面の笑顔がかわいいな、なんて思いながら、その少年からコーヒーを受け取った。

(ふう…落ち着く。)

ん？

なんかおかしいよね？

「 ってそりゃ和んでる場合じゃないッ！君誰！？」

私がそう叫ぶと、少年は『え？』と、目を丸くする。  
私よりも年下に見える少年は、黄緑の髪に、紫の瞳という人間上有り得ない容姿。

なんかこれ、デジヤブ

「どーしたの沙良ちゃん？玉焼き作ろうとしたら、玉子から鶏出  
てきた？」

長い朱色の髪を垂らし、大きく欠伸しながら起きてきた朱鳥。

「あ、朱鳥助けて！」

「アレ? シツ ハリなしつて、あ、翠じゅん。朝食作ってくれたの?  
?」

朱鳥は田の前に立つ少年に驚きもせず、そもそも然かの様に振る舞つ。  
おいしゃー、とか言つてサラダに手伸ばしてゐし。

「ちよ、ちよっとーどりうつ事?」の男の子誰?」

「んん~? あ、やつか。昨日ちゃんと説明してなかつたね。」

朱鳥が呑氣にやつぱりつと、黄緑の少年はまたもや『えつ』、と声を  
零す。

「朱鳥僕の事言わなかつたの?」

「だつて昨日はゴタゴタしてたんだもん。」

なんだか言い争つてゐ。どううつ事?

「じゃあ、改めて紹介します。朱鳥の弟で【紫音翠】といつます。  
これから色々とよひじくお願ひします。」

ペコ、とおじきく少年。

え? 紫音? 弟? ...え?

「混乱してゐね沙良ぢゃん。」

「だ、だつて紫音さんは私より年上で朱鳥の姉……」

言いかけたところで、再び私の脳で等式ができた。

紫音さん=朱鳥の姉

朱鳥の姉=猩色族

猩色族=朝と夜で性別転換

つまり、夜女性だった紫音さんは昼は男になるので…

「ええええええええ！…！」

「ナイスリアクション」

パチン、とウインクして親指をたてる朱鳥。

だつて昨日と性別どころか年齢や人格まで違つじゃん！…

「えつと、沙良さん。昨晩はなにかご無礼な事しましたでしょうか？なんか僕、性別変わると人格まで変わって、その上記憶もどぶもので……」

遠慮がちに、うつ向いて頬をかく。なるほど、朱鳥以上に二重人格なのね。

「昨日沙良ちゃんを押し倒したんだよ？」

「えええっーー。」

しかも純情少年。朱鳥の発言に顔真っ赤にして流れる姿なんか可愛い。

(あら~ドモ……)

「……翠くん。なんで昨日はずっと女だったの?..」

「あ、それはきっと時差ボケの様なものだと思います。」

時差ボケ！？

異世界と外国って似てるの！？異文化ノリノリケーキシラーン！？

つて、私自分で言つておいて意味不明だよ。

「あ、そういえば朝食作ってくれてありがとうございます。」

ふと思いつき、感謝の言葉を述べる。

「いや、住ませて頂けるのですから、これくらい当然ですーー。」

はにかんだ様に笑う。

朱鳥と同じ血が流れてるとは思えないーー感動して泣きそうーー。

「でも沙良ちゃん気を付けたまつがいいよ~紫音さま平気でセクハラするし、翠だつて純情とはいえたまつ思春期真っ盛りだもん~。」

おどけて詫ひ朱鳥。お前は存在そのものがセクハラだ。

「うわこちよ朱鳥ー存在自体がセクハラの朱鳥に言われたくない！」

「..」

「...翠くん、シシコリ属性？」

「まあ、どうちかといえば

「

好感度、倍率ドンーー！」

## 第16話 来客は幼馴染み

もつなにも言わないよ

第16話 「驚くなよー?」 って言われたから無反応なのになぜか怒られた

そうだよね。人生、大小なりに個人差は有れど、いろいろ起こると  
思うよ?

空から美少女が降つてきたり、遅れて弟がやつて来たり、そのふた  
りは昼と夜で性別が変わつたり、その上変態だつたり。

人生一度きりだもんね。いろいろ体験した勝ちだよね。

だからもういいの。こうなつたら最後まで付き合つさ。こんな心広  
い私には拍手)。

なんて思つかあああああーー！

嫌だよ、ものす「」に嫌だよー！なんで私がそんな疲れる真似しなきゃ  
いけないわけ！？

私ほど平凡を愛してる女はいないよつー

え？ なんでこんなに荒れてるかつて？

聞いてーぜひ聞いて！

だつて、だつて「」の朱色変態美少女が……！

男連れ「」んでるううう（私の部屋）。

しかもその男つていうのが、私の幼馴染みなわけ！いつのまにそんな仲良くなつたのー？

「沙良ちやん、顔恐いよ？」

ひょー、と私の顔を覗き「」む朱鳥。 そんな朱鳥の隣には、やや困惑氣味の純が。

「……朱鳥、説明しなさい。」「の状態はなに？」

「」「の状態つて？」

「あんたが純を連れてきた理由よ！だいたい何なの？久しぶりに、学校から別々に帰れたと思ったたら、あんたは純と帰ってくるし。純も純よ！なんで当たり前のようここ處に座つてゐるわけ！？」

ビシッ、と指差して責めよると、純は煮えきらない返事をする。彼自身、状況を理解できてないようだ。

「もー、沙良ちゃんつたら、ヤキモチ？大丈夫。自分が好きなのは沙良ちゃん や 痛ツ」

全部言こさる前に頭を叩いてやる。自意識過剰にも程がありすぎだわ。

「あの～、おふたりわ～」

不意に、純が言葉を発する。私と朱鳥は一緒に振り向いた。

「朱鳥ちゃんに呼ばれて來たけど、此處に俺いていいの？」

……もつと強制的に引っ張ってきたんだらうな、朱鳥。その光景が目に浮かぶ。

「ああ、帰つていよいよ。」めんね、うちのバカが迷惑かけて」

思えば、朱鳥と純つて何氣初対面？クラス一緒に余ったことあるだらうけど。前は朱鳥、男だったしね。

「いや、迷惑じゃないけど。久しぶりに沙良の部屋来れだし」

「…………そ？」

そりいえば、あれからはお互の部屋行き来してなかつた。……もう、必要ないと思つてたし。

「え、なになに？ふたりはどういう関係？」

私と純の間に入りこんで、首を傾げる朱鳥。除け者にされたのが嫌だつたのか、眉が下がつてゐる。  
かわいいなチクショ。黙つてりや美人なのに。

「……別に、ただの幼馴染みだよ。ね？」

「え、あつ、うん」

純の発言にあわてて同意した。少しだけ、胸がチクリと痛むのは、あつと氣のせい。

「……純くん」

朱鳥がふと言う。え？と漏らした純の手を引っ張り、玄関へと連れていつた。

「ちょつ、朱鳥！？」

置いてきぼりをくらい、ふたりを追い掛ける。そこには純を外へ出している朱鳥がいた。

「えつと、朱鳥ちゃん？」

戸惑つてゐる純に朱鳥は更に素つ頗狂な言葉を放つ。

「帰つて」

はあああああ！？

何言つてんのコイツー自分から連れてきて、さつさと門前払い！？

「朱鳥！なにバカなこと

「だつて……」

小さくなる朱鳥。らしくなくてなんだか困る。いつもはものすごいポジティブで自己中で我が道を突っ走る朱鳥よ？控え目なんて似合わなすぎる。

「いや、いいよ。元々俺は用なかつたし。帰るつて言つても直ぐ隣だしね」

ハハッ、と爽やかに笑つて、純は去つて行つた。閉められた扉がバタンと響く。

純、なんて良い奴なんだ………さすが私の幼馴染み！

「ふーんだ。」

後ろで朱鳥がこぼす。なんだか不機嫌な声。なに？めずらしい。

「どうしたの朱鳥。」

そう聞くと、朱鳥は口を尖らせそっぽを向いた。頬は淡い薔薇色に染まつている。

「朱鳥？」

「だつて、自分だけ除け者にするし。しかもなんか純くんと沙良ちゃん意味深な発言してさ。」

その後もぶつぶつと呟く彼女。  
これはもしかして……

「ヤキモチ？」

朱鳥は黙つて頷いた。

うわっ、ヤバイ。今の朱鳥ものすげく可愛い。なんだここの可愛い。

コイツはあれだよ？あの朱鳥だよ？平然とセクハラしたりうちの食費を吸い付くす最悪な悪女だよ？

なのになんでこんなじらしいの――――――！？

「…自分で連れてきたのに？」

「だ、だつてー。」

朱鳥はバツと顔をあげる。

いや、なんか意地悪したくなっちゃって。私サドなのかな。

私をうるんだ瞳で見上げる朱鳥。ヤバ、心臓がかなり働き者になってるよ。

「田が合つたから、これは招くしかないなと」

「待て待て。招くもなにも私の部屋だぞ？いや、その前にお前は田が合つたら誰でもかれでも連れこむのか？」

「誰でもじやないもん！ フィーリングが合つた人だけだよ！」

「偉かねえッ！！」

やつぱバカだわこの娘！

「沙良ちゃんは朱鳥のなんだからね！」

そう宣言して、私の腰に腕を絡めてくる。

普段なら『んなわけあるか！』って言つて殴るところだけど、なんかかわいくてそんな気になれない。

……かなりの重症だわ私。

「仕方ないな」

ため息混じりに漏らして、朱鳥の頭を撫でてあげると、彼女は無邪気に笑つた。

キッチン

「あれ、お客さん帰っちゃったんですか？」

お盆にカップを3つせる、ビニカル出したのかお菓子まで用意して  
る翠くん。

「あ、あので、そんな家政婦みたいな真似しなくていいよ。」

「いえ、居候の身分ですか?」のべりこむかれてこそ…」

「……健気だね」

すいぶん家庭的な男の子だな。まあ、朱鳥の弟やつてるんだから、  
反動かもね。

## 第17話 倒錯の世界？

誰か私を助けて……。

第17話 前回同様、状況確認してみよう

それは休日の曇下がりの事

「ねー沙良ちゃん」

ベッドに寝転がり、本を読む私をつづく朱鳥。返事するのが面倒で無視してたら、沙良ちゃん沙良ちゃんとつづいて私を搔きぶる。

「……なによ？」

さすがに鬱陶しくなつて、上体を起こして、床にぺたりと座りこむ朱鳥に尋ねた。

相手にされたのが嬉しかったのか、朱鳥はパッと表情を輝かせる。  
そして放った言葉は「」。

「ひ・茁」

「…………」

「ああ、シカトしないでー。」

再び本を読み始めた私に焦る朱鳥。それさえも無視してると、本を取り上げられた。

(むうひ、良こと)うだつたのにー。)

渋々私はひみつを彼女の方へ向く。

「暇なう翠くんと遊んでくれば?」

「翠は買い物。今日はタイムセールなんだって」

……どこのあの子は家庭的なんだ。

家事もほとんどやつてくれるし。嬉しいけど、私の料理の腕落ちそうだな。

「ね、だから沙良ちゃん一緒に遊び?」

濡れた瞳で上目使い。演技と理性では分かつてゐるんだけど、ぐっとくる。可愛いなあ……。

「聞いてる?沙良ちゃん」

首をかしげ、顔を近付けてきた。だから、あなたのアップはヤバイ  
んだつて！

「沙良ちゃん、顔赤い」

赤くもなるでしょうが！猩色族だかなんだか知らないけど、なんで  
そんな無駄に美少女なの！？

「いやん、それほどでも」

！？ 心読まれたつ！

「ふふ。ね、遊ぼう……？」

いつもより数倍甘い声で耳元に囁かれる。体がゾクリと跳ねた。

朱鳥がベッドに乗り上げ、ゆっくりと私の肩を押してゆく。背中が  
柔らかい布団に触れて。朱鳥は私の足を跨ぐように四つん這い。

「ちょっと」

上から見下ろされ、心臓が高鳴る。慣れない角度。

（いや、何この状態。なんで私朱鳥に押し倒されてるわけ？）

思考が上手く回らない。

彼女の綺麗な微笑に、背筋がゾクゾクする。そして、次第に朱鳥の  
顔が近付いてきて。

「つて、ストップストップ！アンタ何しようとしてるのよー？」

「そんな野暮な事聞かないでvvv」

私は本能的に身の危険を感じた。

(お、犯されるううううーー)

「こやあーー翠くん助けてええええ！」

「翠は買い物中」

「主婦かあの子はあつーー」

なんで肝心な時にタイムセールー？誰か「イツを止めて！」

朱鳥は慌てふためく私を見て、クスクスと笑う。チクショ一殴りたい。だいたいこの変態、なんかやけに怪力なんだけど？

「沙良ちゃん、可愛い」

そつついで、朱鳥は私の頬にチュッと音をたてて軽くキスする。

「……ッ」

一瞬のその感触に、肩が揺れてしまった。

(私、ノーマルなのにこつ)

そつちの趣味はない。

そもそも、今まで手を出された事はなかつたのに、なんでいきなり……。過去最高のセクハラも、言葉だけだった。いや、アレとかソレとかは銀だつたし。

あり？もしかして銀の時のほつが変態度アップしてる？

「ひー、結局はどうでも変態じやん！」

私はそう叫び、朱鳥の顔を押し返す。

「おとなしくして沙良ちやん

「できるか！　あー」

振り回した腕が、朱鳥の手によってベッドに縫い付けられた。布団が乱れ、シーツに皺ができる。

(え、何コレ。そういう展開？そういう展開なのーー。)

汗ダラダラの私とは対照的に、笑顔満面の朱鳥。なぜそんな楽しそうなわけ？

「あ、朱鳥……待つて」

「い・や」「

「ひちが嫌いやボケエエエ！」

心中でツツ「//」を入れている間にも、朱鳥の顔が再び下りてくる。

「いただきまーす」

「 ツ」

もつダメだ、そつ思つてきつて田を瞑つた瞬間

ガラツ

「沙良〜、入るよお？」

扉の開く音と、ゆつたりとした緩いソプラノが顔を出した。

「ひ、姫乃」

「あ……、おとつこみ中だつた？」

私達を見て、扉を閉める仕草をする姫乃に向原私は必死に首を振る。よく分からぬけど、こんなにもグッドタイミングなんだ。去つてもらつては困る。つていうか、この変態と一入きりは嫌だ。

「ほ、ほら朱鳥！姫乃来たから退いてつ」

「え？自分は見られてても気にしな ぐはあ！」

危険なことをほざく朱鳥の腹に、蹴りをかましてやる。かなりの力を込めたからか、朱鳥はお腹を押されてのたうちまわった。

(調子乗りすぎだバカ)

涙目の中を横目で睨み、私は体を起こす。  
きょとん、とした表情をしてる姫乃を手招きした。

「相変わらず愛されてるね

姫乃はストン、とベッドの上、私の隣に座りながらそんなことを言つてのける。私はため息混じりに

「からかわれてるだけよ」

と返した。

だつてこんな変態、どうせ私じゃなくてもいいんだよ。人をおちやくるのが好きなだけ。

(そんなのに巻き込むなつづけの)

生憎、倒錯の世界に興味はない。いや、銀ならいいって訳じゃないよ?

「酷いよ沙良けやへん」

私のふくらはぎに腕を回し、膝に頬をすり寄せてくる。  
チツ、もつ復活したか。治癒力高えな。

「ところで姫乃。なんで私の家に?」

気になつてた事を聞く。いや、迷惑なんかじゃないけど。むしろナ

イス。

「えっと、ケーキ焼いたから食べてもいいよ」と黙つて

そう答え、持っていた箱を私に渡す。うん、ケーキ焼くなんて女の子らしい。本当かわいいわこの娘。

ありがとう、とお礼し、私は箱を開けた。中についたのは、美味しいそうなベリーパイ。色鮮やかで、キラキラした光がとっても綺麗。

「わあ、すごい。早速食べよー。」

私が立とうとした時、

「ただいまです」

ガチャツ、といつ音と共に玄関から聞こえてきた。

「あ、翠帰ってきた~」

そう言って、朱鳥はパタパタと彼のもとに走っていく。ああ、やつとタイムセールから帰ってきたのね。夕飯、なんだろう。

「沙良、アリリって誰?」

首を傾げる姫乃。

……また説明しなきゃ駄目?

あーなつてこーなつてこーなつたのオオオ！

## 第17話 倒錯の世界？（後書き）

ひょっとお色気 前回とは打って変わって、朱鳥攻め攻めです。次  
回に続きますよ。

## 第1-8話 バイバイ翠くん

嬉しくない、全然嬉しくないよ

第1-8話 360。回つたらもとに戻つちゃうじやん

「へえー、弟くんかあ」

一通り理解したらしい姫乃是、感嘆符と共に漏らす。翠くんはペコりとお辞儀して、よろしくお願ひします、と言つた。礼儀正しい子だな。感心するよ。

「それにしても、沙良すごいねえ。異界人ふたりと同居してんなんて」

……不可抗力だけどね。

「本当にすみません。僕が湖に落ちたばかりに……一しかも姉みたいな変態と寝てるなんて、申し訳ないです」

頭をうなだらせ、謝罪の言葉を述べる翠くん。

「ちよつと翠、人の事言えないでしょ。アンタだって紫音の時は自

分以上に危ないじゃんっ！

タルトの欠片を口の横付けて反論する朱鳥。つていつかコイツ、ひとりで食べ過ぎじゃね？私のぶんは？

「仕方ないじやん、記憶ないんだから。昼も夜も変態道突っ走ってる朱鳥に言われたくないよ」

「その道極めてるもん」

「よしーー！」

ボケヒツツコミを披露するふたり。姫乃はそれを笑顔で見つめてる。なんだかなー。

「それに沙良ちゃんは嫌々言つてるけど、夜じや結構その気なんだぞ。ただ明るいうちは恥ずかしいから照れ隠しに暴言を吐くだけさ

」

何言つてんだこのアマ。

「ええっーー本当ですか！？」

え、そこ信じちゃうの？

「沙良かわいいー」

天然姫め。意味わからないくせに乗じるな。

私は順にこの馬鹿たちの頭を叩いた。『痛い』と嘆く3人は、とり

あえずシカト。

「酷いよ沙良ちゃん」

涙声ですがりつこてくる朱鳥。本音、ついといひしな。翠くんを見習え。

「ねえねえ、沙良」

「ん？」

朱鳥と言つて合ひしてたら、不意に姫乃が話しかけてきた。  
そして笑顔で衝撃発言。

「翠くんは私の家に居候したらどうかなあ？」

「…………ええ！？」

数秒遅れて、リアクションする翠くん。

え、ちよつと待つて。今この娘なんて言つた？

私の聞き間違いだよね？

そんな私の思いとは裏腹に、姫乃は続ける。

「だつて家なら広いからちゃんとお布団で寝れるし。お母様には秘密で私の部屋にさ。あ、見付かつたら適当に誤魔化して……」

「えつ、いや、だけど、そんな迷惑かけられませんー。」

「迷惑じゃないよ？」

「翠くんす」に動搖してゐる。まあ、初対面の人にはいきなりそんな事言われたら驚くか。

それに翠くん、確かに今はリビングのソファで寝てるんだよ。しかも、夜は紫音さんだから余計に少しありがつ。

「駄目だよ姫乃ちゃん。翠なんかと同じ屋根の下で暮らしたり、お嫁に行けなくなっちゃうよ?」

「うぬせこぞ朱鳥!」

翠くんには失礼だけど、朱鳥の言ひ方にも一理ある。せひ、紫音さんには前科があるしや……。

「よくわからないけど、多分平氣。それに私、弟ほしかったんだ~」

のほほん、と言つ姫乃。全然平氣そうじやないんだけど。

「何言つてゐる姫乃ちゃん!今はかわいい男の子だけど、夜は卑猥な危ないお姉さんだよお?」

「否定はしないけど、かなりムカつく」

「本当の」とじやん。前だつて自分の沙良ちゃんを襲つたし

いつからお前のになつた。それに襲われたのは未遂だ。

……わて、どうしようか。姫乃はすっかり乗り気だし、ちやんと紫音さんにも言えれば大丈夫かな？

だけど、猩色族はことん人の話聞かないしな。

「でも沙良。襲われたのは1回きりなんでしょう？」

「まあ、そうだけど。」

「じゃあ大丈夫！」

それもそーカ。それ以来、何もされてないし。何よりいい子だからね。心配いらないかな？

「じゃあ、そうしてもうひつ？翠くん。」

「ですが……。」

「もひ、子供は遠慮しなくていいの。」

渋る翠くんをなんとか説得し、姫乃の家に居候することになった。早いほうが多いという事で、帰る姫乃と一緒に行った翠くん。

でも、いざ参えるともつたないなかつたな。翠くん、癒し系だし、家事できるし、いい子だし。

たまには遊びに来てもらおうひとつ。

「これで、朝晩ふたつきりだね」

「

！－み、翠くんやっぱ戻ってきてええええー！

第19話 セブン（前書き）

久しぶりの銀登場！

## 第1-9話 セーブルンボ

後悔先に立たず、覆水盆に返らざつ。

第1-9話 そんなの迷信でじょうが

「沙良、何食べてるの？」

PM8時、私がリビングで果物を食べると、興味をひかれたのか  
銀が尋ねてきた。

「さくらんぼ。純から貰ったんだ。銀も食べる？」

「純……。ああ、沙良の幼馴染みで隣の部屋の」

「そうそう。そしてあんたが無断で私の部屋に入れた人。」

「こ、と笑顔で嫌味を言つてやれば、銀は苦笑いした。

「……まだ根に持つてんの？」

「そんなことないよ？もつ全然気にしないよ？」

笑みを深くして言い放てば、困り氣味の銀。朱鳥も銀も同一人物なんだから、まだ常識の伝わる銀のほうに嫌味言わせてよね。

朱鳥じゃダメ。怒るだけ、体力の無駄だわ。

「いや、本当にじめんって。でも大丈夫、俺なら絶対入れたりしないから。」

大丈夫っていうか、それが当たり前のよ。一応ここのは、私の部屋なんだから。好きでマンションに独り暮らししてるわけじゃないし。「俺は沙良との二人の時間大切にしたいから、他の男なんか部屋にあげない」

サラリと恥ずかしい台詞を言つてのける。ただでさえ美形なんだから、止めてほしい。私の心臓こわす氣か。

「あんたね、そういうこと簡単に言わないでくれる? 純粹な私には毒よ。」

「純白を自分で汚していくのって、快感じやん?」

「悪趣味。変なことしてたら、はっ倒すわよ。」

実をひとつ摘みながら睨めば、銀は『へえ』と片眉をあげた。……嫌な予感。

「変なことって、どんなこと?」

私が持っていたさくらんぼを奪い、ずいっと迫つてくる。

前の私なら真っ赤になつて慌てたわね。でもその甘いメロメロマスクにも、もう慣れてきたのよー。

「だから……やつこいつことだつてのーーー。」

パンツ！

思こきりビンタしてやつたら、派手な音が室内に響く。

この整いすぎた顔に平手を喰らわせるのは躊躇つたけど、手が反射的に動いてた。成長ね、こりゃ。

「いたたた……。まつたく、沙良は手厳しいな。ま、そういうところがイイんだけど。」

「……マゾ。」

「いや、俺はどうかかつて言ひとサド寄り。」

そんなキラキラした笑顔で言われても、だいたいなんで性的嗜好の談義してるのさ、私等は。

なんだか馬鹿馬鹿しくなつて、私はまだ何か言つてゐ銀を無視して、わくわくんぼを口に含んだ。

うーん、美味しい 純に感謝だな。私がわくわくんぼ大好物つて知ってるなんて、さすが幼馴染み歴13年ー明日学校でお礼言つとかなれや。

あまりの美味しさにほっぺた落としてると（例えよ例え）、不意に肩を叩かれた。首を回せば、笑顔満面のセクハラ銀頭。

「……なにさ」

警戒心120%の目を向けると、彼はさくらんぼのベタ（べき？）を私の目前に差し出す。

いや、意味分かんないし。

そんな私の心情を読んだのか、彼は口を開いた。

「これ、口の中で結べる？」

「…………は？」

素つ頼狂なその言葉に、ついマヌケな声がこぼれた。

あ、いや、でも待てよ。なんか聞いたことがある。確か結べると、キスが巧いとか。

「…………嫌」

「ええ、なんで！？」

「だつてくだらないじゃない、そんなの。」

「うう、くだらない。いつたい誰が考えたんだか。だいたい、そんな器用な真似できる人いるわけ？」

私は銀から渡されたヘタを、指先でキュッと結んでみた。

口の中で「これができるって事は、舌使いが巧いって事よね。

（……。自分で思つてなんだけど、かなり恥ずかしい発言してしまった）

私はため息をつき、結んだヘタをテーブルに乗せた。ヤバイ、顔赤くなつてるかも。

「でも、これつて案外簡単だよな」

そう言つて銀は、ペロ、と舌を出して私に見せた。舌の上には、見事に結ばれたヘタが。

「う、うう……。」

「こちひき定した事を、あいつやつてのけたよ！」

「や、器用ね」

「やうか？でも紫音のまつが凄いよ。5秒以内で、みつつくらい結べるから」

恐ろしき、猩色族。つていうか紫音さん、見た目を裏切らない。いかにも百戦錬磨つて感じだもんね。

「あ、ふたつ目できた」

そう言つて、銀はまたさくらんぼのヘタを舌で結んだ。

10

銀 今日からアンタ、床で寝て

「ええっ！？」

ものすごい反応する銀

(いや、だつてねえ?)

ちよへ、それは無いんぢゃない、沙良

「ハルゼー、島の危険を感じたのよ」

「大丈夫だ。沙良が寝てる間は手を出さなきゃ！」たぶん！！

「隠昧を強調してんじゃねええええ！」

結局その夜、嫌がる銀を無理矢理床に転がしました。

(朝にはすでに隣で寝てたけど)

こんな人と暮らしてて、私お嫁に行けるかな……。

第19話 セレブランチ（後書き）

なんかそういう話、聞いたことあったので。ついでに私はできません！

## 第20話 o n e y u y o u l o v e

だつて好きなんだもん！

### 第20話 本氣と書いてマジと読む

「ね、付き合つ 「やだ」

「…………え？」

「用つてそれ？じゃあ帰るね」

田の前でぽかんと口を開けてる男子に笑顔で告げ、背を向けようとしたら、腕を掴まれた。

「ちよ、ちよっと待つてーこの僕が付き合つてつて言つてんだよー！」

この僕つて言われてもなあ。だつて自分、この人のこと知らないし。

「僕等お似合いだと思わない？学校1モテる僕と、謎の美少女転入

生の君。」

自分が美少女って言つのは当たつてゐけれど、この人が学校で一番モテるとは思えないなあ。

つていうか、自意識過剰? やだなあ、気持ち悪い。……え? 自分は違つのかつて? だつて朱鳥は本当に美少女だもん。

「悪いけど、あなたと付き合ひは駄ないの」

そう言つて手を振り払おうとしたが、逆にひかれて。そのまま  
ゲッ!

「せり、しりすれば自然とドキドキするだらう?」

いやいや、ドキドキじろかゾクゾクだよ!

気持ち悪いーなんでこんな名前も知らない奴に抱かれなきゃいけないわけ!?

「どう? 付き合つ?」

「……セ……」

「え?」

「放せつづてんだる」のブスキモ男! ——!」

「ぐはあああああ!」

デッシャーン! ——!

思いきり強く急所を蹴つたら、そいつはかなりぶつ飛んだ。

そして涙田で、信じられないことでも言ひたげに自分を見てくる。

「アンタみたいな奴がこの朱鳥様に告白するなんて百億光年早いよ。  
一昨日来やがれ」

「……なつ……」

金魚みたいに口をパクパクさせて呆然としてる男子にバイバイって  
言つて、自分は今度こそ踵を返した。

「アンタそれ、隣のクラスの相川君だよ」

「あいかわ?」

教室に戻つて沙良ちゃんに事情報告したら、そんな名前が出ってきた。

首を傾げると、呆れた顔をされる。酷い、朱鳥ショック。

「相川君はね、とつてもモテる男の子だよ。ファンクラブまである  
の。すごいね朱鳥ちゃん、そんな有名人に告白されるなんて!」

沙良ちゃんの隣にいた姫乃ちゃんが笑顔満面で言った。

「え? つてことはモテるって話ホントだつたんだ。 そんなにかっこいいかなあ?」

「私はあの人あんま好きじゃないけどね。 ナルシストって嫌い。 だったら同じくらいモテる純のほうが良い。」

「純くん? そんなモテるんだ。 でも朱鳥も純くんのほうが好きだな、良い人だし。」

沙良ちゃんとの関係は気になるけど、なんか好き。 インスピだけど。

「でももつたいないわね。 アンタみたいな奴があの王子に告白されるなんて。 なんで断つたの?」

首を傾げて尋ねてくる沙良ちゃん。 ふふ、 可愛いなあ。 理由なんか決まってるじやん。

「それはね、 正直なんか気持ち悪かっだし、 何より浮気はしないもん!」

「ちよつと待て。 浮気つてなんだ」

「いやん、 沙良ちゃん 分かつてゐるくせにー自分は意外と一途なのよん

「こいつ私とアンタがそういう関係になつた! 言つてみるー。」

「そんな……、あんなに愛を語りあつた夜を忘れたの……？」

「キモイツツーの……」

ガツシャーン

ぐはあ……

沙良ちゃんの鉄拳が、み、みぞおちに……！ヤバイ、吐きそう。朝食べたタツミさんワインナー出てくるかも。

「ひ、ひどこよ~」

お腹を押さえついでしづくまる自分。見上げれば、沙良ちゃんの冷たい瞳。

…………可愛いや〜（危

「やつやつて何でもかんでも変な方向に話を繋げるな……！」

「あ、愛故に」

「黙れ変態ーどいせからかつてゐるだけの子供に。生憎やつちの趣味は無いのよ。他を当たつておけ！」

朱鳥を指差して、ガミガミ叫ぶ沙良ちゃん。

ほえ？からかつてゐるだけ？？

その時ピーンとひらめいた。自分にブレーキは付属されてないので、一度そう思つたら止まらない。

「ウフフフ」

きやせ、つい笑みがこぼれちゃった

だつてだつて、沙良ちゃん可愛いんだもーん。

「なによその不気味な笑い方は」

「えへへ。大丈夫だよ沙良ちゃん。」

「なにがよつ」

「自分はからかってなんかない。本当に好きなんだよ。」

上田使いで甘い声を出せば、沙良ちゃんがひるむ。やっぱ自分美形だなあ。沙良ちゃん、朱鳥の濡れた瞳に弱いもんね

「ば、バカじやない?」

そつ音につつも、視線泳いでるよ。ホント分かりやすいんだから。

「私は誰よりも沙良ちゃんが好き。どんなに素敵な人に告白されても、搖るがないよーだつて沙良ちゃん以上に可愛い子なんていないもん」

笑顔で言つて、自分は沙良ちゃんに抱きついた。頬擦りしたついでに、その薄紅色のほっぺに軽くチューする。

たちまち真っ赤になる沙良ちゃん。もへ、マジでメロメロなっちゃうー。

「…………かり…………」

「咲え？」

「だからさうこいつ趣味は無いって言つただろオオオオ…………」

「ひよやあ————」

本日2度田の鉄拳を喰らつた。

……別にいいよ、愛があるな。自分は、意地つ張りな沙良ちゃんの照れ隠しだと勝手に思つてゐるもん！

それに朱鳥は沙良ちゃんが大好きだから、鉄拳くらい我慢できる<sup>シ</sup>  
…………限度があるけど。

## 第21話 不純異性交遊反対（前書き）

ちょっとシリアス気味です、はい。あまり口元で言つぽくないです。  
特に前半。すいません（ - - - )

## 第21話 不純異性交遊反対

第21話 美しい花には刺でも毒でもなく電波があった

放課後、朱鳥の田を盗みひとりで帰ることに成功した私。ついでに姫乃は委員会の仕事。

「後で朱鳥に怒られるかな…」

まあ、最近は扱い慣れてきたから別にいいんだけど。

むしろ銀のほうが厄介。無駄に美形だし、エロいし、いつも余裕だし、変態だし、なんか一枚上手だし、時々キモいし。

……悪口か、これ。いやでも、本当のことだし。

「沙良？」

ひとり悩んでいたら、不意に背後から肩を触られた。首をめぐらせる。

「…純。」

「今帰り? なんなら一緒に帰ろ!」

「いいよ。」

了解の返事をすると、純は表情を輝かせ私の隣につく。嬉しそうに見えるのは、私のせい?

(願望なのがも)

いや、それはない。もうふっさつたんだ。いつまでも未練タラタラなんて、私は嫌。

『好きだから、別れて』

そう告げられた時から。私は成長してる? 強くなれた?

嫌いになれない。だけど、昔みたいなあの感情はないの。愛し続けるには少し、傷付すぎた。

「沙良?」

彼の声にハツとする。

「あ…」めぐ。「

「いや、俺はいいけど。大丈夫?ぼーっとしてたよ。」

「ちょっと考え方」

そう答えると、純はそっかと一緒にぼーし、また前を向いた。

考えている内容は聞かないんだね。平気、悲しいなんて思わないよ。

だってこれは、貴方が望んだことだから。

帰り道が、やけに長く感じた。

「じゃあ、バイバイ」

マンションに着き、お互に違う部屋へ入る。私は微笑む彼に、小さく手を振った。閉まる扉の音が、哀しく響く。

私は昔も今も、純が好きです。けれどそれは、大切な幼なじみとして。

またあの関係に戻りたいなんて、もう言わないよ。

「沙良ちやんおかえりー」

扉を開けてすぐ現れた朱鳥。

「つー、沙良ちやん！なんでドア閉めるのー？」

ああいけない。つい反射的に。

つていうか、この子いつの間に帰ってたんだ？相変わらず謎が多い。

べたべた触れてくる朱鳥を強引にひき剥がし、私は浴室へ向かった。

腕を絡ませてくる朱鳥を強引にひき剥がし、部屋から追い出す。

「わよ、沙良ちやんーーー！」は朱鳥たちの愛の巣じゃない！なんで追い出すのーーー！」

無視無視。

私はふつつとため息をつき、制服を脱いだ。  
空氣にさらされた素肌。

「ねえ沙良ちやん。」

ドア越しに、朱鳥が声をかけてきた。

「……なこ？」

返事をしつつも、手は止めない。ホックをはずした。

「今日純くんと一緒に帰ったでしょ。」

知っていたんだ。どこで見たんだろ？。

「…純くんと沙良ちゃんって、どういづ関係？」

スカートがパサリと落ち、床に広がる。

聞いてどうするのと言つたところだ、この変態のことだ。まともな返事は期待できない。

ならば、正直に言えばいいんでしょ？

私はスカートを拾い、ハンガーで挟んだ。

「幼なじみだよ」

そう呟いて。

「それで、元カレ」

小さく付け加えた言葉に、朱鳥の反応はない。聞こえなかつたのだろ？。

クローゼットを開けて、適当に服を選ぶ。

バンッ！

大きな音に驚いて振り返れば、目を見開いた朱鳥と視線が絡んだ。

「……元カレ?」

わたしは何も言わない。

「モト 樹の彼氏じゃなくて?」

「んなわけないだろ」

あ、ついシッ 「んでしまった。ヤバイな私、シシ ハハ道まつじぐらだ。」

「元の彼氏?……?」

うるさだ瞳で見上げてくる。ちょっと、だからその上田使い反則だつて。なんかものすごい罪悪感に襲われる。

「あの、朱 「ビリआでいったのー?」

……は?

「A? B? も、まさかCなの……!?」

古こよ。やしてキモこよ。変態にも程がある。

「なんであんたにそんな事言わないといけないの」

「い、言えないのー? 言えないような事しちゃったのー?」

「やかましごー」

「こやああああー！否認してくれないーーー！」

ああもうー。こちこちひつむたこ子だなあ。人の傷をえぐるなつて。

「……で、実際どいまでやつたの？」

どいから取り出したのか、マイクを私にむけてくる。マスクマスクかお前は。

「どいまでも何も、その頃わたし達中学生だから」

あくまでクールに答える。

「バカにしてや駄目だよ沙良ちゃん。今時の中学生は進んでるんだから！」

「近い近い。顔近いって朱鳥」

「不純異性交遊反対！  
つてことど」

ボスンツ

……は？なにこの状況。

なんで押し倒されんの私。

「ど、どきなせこよ」

「こ・や 沙良ちゃんの下着姿かなりそそられるんだもん

ハツ、モフ言えば……！

「不純異性交遊反対じゃ なかつたの！？」

乗しかかつてくる朱鳥を押し返しながら抗議する。だけど変態には  
きかないらしい。

「大丈夫。コレ不純同性交遊だから」

「大丈夫言わないそれエエエエエー！」

その後わたしは、脱ぎ出す朱鳥の顔面に鉄拳を浴びせ、操をなんとか死守した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0393b/>

---

ミラクル症候群

2010年10月20日19時51分発行